

「日々の理科」(第1887号) 2019,-9,-8

「日新館のヤマボウシ(1)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

9月上旬に、6年生と福島県の裏磐梯に林間学校に行ってきた。天気があまりよくなかったが、登山、カヌー、スケッチ、サイクリングなどを楽しめた。夜は夜で「ホーンテッド・ウォーキング」(俗にいう「きもだめし」)や、「夜店」で大いに盛り上がった。



最終日に訪れたのが、会津若松の「日新館」である。日新館(にしんかん)とは、会津藩の「藩校」である。江戸時代の1798年(寛政十年)に、会津藩家老、田中玄幸によって計画された。会津藩士の子弟の教育施設として開設され、今でいえば小学校4年生ぐらいの子どもからここで学んでいたという。戊辰戦争で焼失したが、忠実に復元され、観光施設として公開されている。



館内には「白虎隊」の藩士たちが学ぶ様子が、ジオラマ展示されている。当時の授業の様子を、子どもたちも興味津々に見学していた。



授業は、武術、剣術、弓術、礼儀作法と多岐に及んでいた。天文学も必修で、当時としては珍しい「天球儀」や「天文台」まであった。「日本最古のプール」も構内に復元されている。



日新館の構内を子どもたちと歩いていると、「先生、サクランボが落ちてるよ!」という。確かに地面にサクランボに似た実がたくさん落ちている。しかし、サクランボは初夏の果実だ。何だろう?



サクランボではない。表面に独特の文様がある。これは「ヤマボウシ」の実であった。ところが、私は咄嗟に名称が思い出せず、「なんだっけなあ?」と首をかしげてしまった。最近こういう物忘れが多くなった。